慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀江帰一著 本邦経済社会の重要問題
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.4 (1916. 4) ,p.581(167)- 582(168)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160401-0167

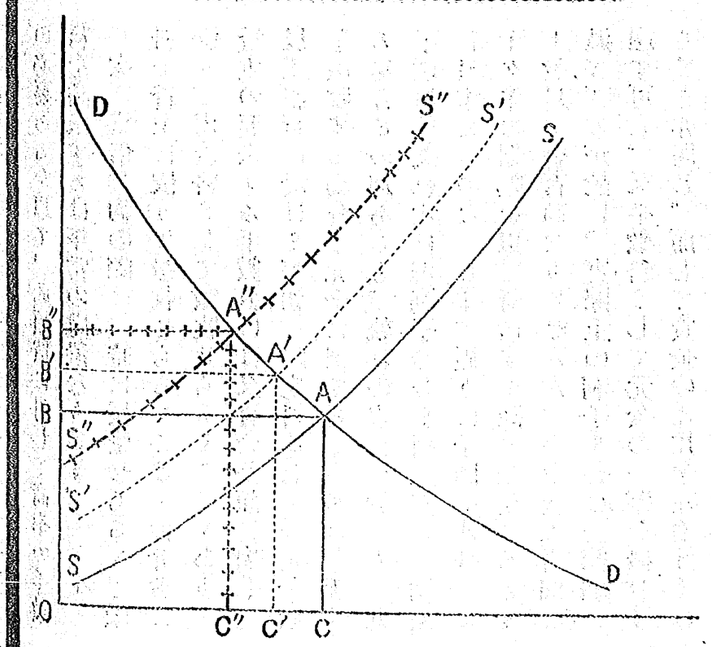
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

即ち此際には八分の利子なりとす。最後に公債社債の募集に關してのみならず、往々個人間の貸借に於ても仲介者が請求する手數料も亦歩合或は一定金額として課せらるゝことあるが、此際に於て資金の需用を左右するは矢張り手數料を加へたる利子歩合にして、供給を左右するは此手數料を加へざる歩合に外ならず。

以上手數料に付きて論じたる所は手數料か實際貸主の負擔せる煩瑣に對して支拂はるゝものなることを前提とせり。若し假りに徴收せらるゝ手數料が實際の手數に對する正當の報酬に超過せりとせば、其超過額は純利子歩合若しくは保險料の一部を構成するものなりと看做す可きなり。若し純利子歩合の一部を構成するとせば夫れ丈け資金の供給を增加するの結果を呈す可し。

以上本節に於て略述せる手數料と利子歩合並に資金の需給との關係は曲線を以て第三圖に之を解說せり。（第三圖）



圖中S″S″は貸付利子が純利子以外に保險料並に手數料を含めりと假定せる場合に於ける資金の需用高を示すものにして、A″は需用と供給との一致點を表はし、OB″は決定されたる利子の高さ、OC″は貸借金額を指示するものなりとす從つて此圖解に依れば、利子歩合が保險料率を含む際には含まざる際よりも高く、且つ貸借高が少きと同じく、利子歩合が手數料を含む際には含まざるときよりも高く、又貸借金額が少きことは一目瞭然たりとす。

尙ほ利子歩合の解剖に就きては以上略論せる以外に說述す可きこと多々あれども、紙面の都合に依り他は後日に之を讓らんと欲す。（完）

批評と紹介

堀江歸一著『本邦經濟社會の重要問題』

大正五年二月敎育新潮研究會發行
菊版二百八十四頁定價金七拾五錢

本書は地方在住の學校敎員に敎材並に一般的知識を提供する目的を以て設立せられたる敎育新潮研究會の發行に係る月刊叢書の一冊にして經濟界並に社會の重要問題に對する著者一流の明快なる說述並に持論を載せたり。全篇は之を緒論以外十四章に分ち、第一章乃至第七章に於て經濟問題を論駁し、第八章乃至第十一章に於ては社會問題を討究し、他の三章は歐洲戰亂と經濟との關係並に英獨の戰時財政の論述に充てたり。

著者は經濟論の部に於て冒頭今次の大戰亂が如何に我國の貧弱なるを遺憾なく曝露せしかを指摘し、次に我國民が大に發憤して進取的經濟政策を執る可きを慫慂し、進んで歐米に對する我債務と貿易の消長との關係を明かにし、轉じて日英佛獨等の兌換制度を略叙して我國の在外貨問題に論及し、再轉して資本の需用供給に對して戰爭が既に及ぼしつゝある且つ將來及ぼす可き影響を細論し、最後に輸出貿易奬勵策並に國產奬勵說を論評せり。

社會問題論の部に於ては、著者は施療、給藥、濟生會、小口保險等の所謂社會政策を拉し來りて我政府が最近に於て採りつゝある救貧的政策が社會改良の根本義に觸れざる枝葉の施設なる所以を高調せり。

本書は經濟界並に社會の重要問題を總て網羅せるにはあらねども、其の緊要なるものゝ一部に對して理論に偏せず、又乾燥無味なる史實統計の編纂に走らず、穩健にして而かも犀利なる筆勢を以て平易簡潔なる說明を與へたるものなれば全く經濟學の素養なき者と雖も、本書に依りて我國のみならず、歐洲諸國の經濟狀態並に重要經濟政策及び社會政策問題の一班を窺ひ、以て人生の最大部分を占むる經濟的活動に關する知識を涵養するを得可く、又既に多少此知識を有する者も本書に依りて特種問題に對する著者の見解に接し啓發さるゝ所少からざる可し。

青木得三著『貨幣論』

大正五年一月東京厳松堂發行
菊版三百八十五頁定價金壹圓五拾錢

著者青木法學士は職を大藏省に奉ずる傍ら專修大學に於て貨幣論並に銀行論の講義を擔任せられつゝあり。吾人の玆に紹介せんとする『貨幣論』は即ち此講義の稿本を補正せるものなりと云ふ。

本書は之を第一編緒論、第二編貨幣靜態論、第三編貨幣動態論並に第四編紙幣論に分ち、緒論に於ては冒頭効用、價値等の概念を說明し、貨幣の職分を明かにし、交換の媒介は貨幣の不可缺唯一の性質なることを詳論し、貨幣が價値の標準として用ゐらるゝは交換の媒介物としての貨幣の職分より自然に生ずる現象なりと說き轉じて貨幣として用ゐらるゝ物質の具備す可き特質を詳說せり。

貨幣靜態論に於ては貨幣制度に對する概括的解說を與へ、貨幣の鑄造に關する技術、規定並に手數料を說明し　次に貨幣流通並にグレシアムの法則を說き、轉じて日本及び重要諸外國の貨幣制度の現狀並に沿革を略述し、最後に萬國兩本位制に對する運動を概叙したる後金貨の統一を圖る可きことを唱道して編を結べり。

貨幣動態論に於ては貨幣數量說の見地より貨幣の購買力の騰落を論じ、金銀產額の增加が貨幣の供給を增加するに至れる事情を略叙し、貨幣流通高が金利步合に及ぼす影響を詳說し、轉じて信用の循環並に恐慌の意義に論及せり。

第四編紙幣論に於ては先づ不換紙幣の本質を明かにし、不換紙幣は兌換紙幣の一變態なりとの說を駁し、前者が寧ろ後者に先だちて行はるゝことあるを說き、不換紙幣の長短を論駁せる後轉じて兌換紙幣に論及し、其發行者、伸縮性並に引換に關する種々の保證及び規定を詳述せり。

以上は本書內容の一班を列擧せるに過ぎざるが、全體の結構より之を概評すれば　著者は單に理論のみを說述するに滿足せずして、隨處に貨幣制度の實際、殊に史實を叙述し、以て理論と實際との關係を闡明するに銳意努力し　又獨斷的推定に陷ゐるを避けんが爲め泰西貨幣論專攻學者の持論を引用するを怠らざる等、其の用意周到なるを示せり。所說概ね穩健、叙述又概